# レイニーソング

梶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
レイニーソング

【Ｎコード】
Ｎ６８２５Ｙ

【作者名】
梶

【あらすじ】
高校生歌手・雨宮小夏として名をはせる少女、瀬尾小夏。素直な歌声の魅力で音楽界をリードしていた――のも、もう過去の話。彗星のごとく現れた新人歌手・ＳＨＥＥＮＡ（シーナ）により、ランキング上位の座を奪われてしまう。それからはなにをしても失敗続きの小夏は、どこへもやりようのない思いを胸中に抱えていた。しかもそのＳＨＥＥＮＡ、素顔も性別も年齢も非公開の覆面歌手で……。

# 覆面歌手の名は

あの空を、貫くすべならここにある。
声という名の矢を放ち、空へ。手を伸ばしても届かない、はるか高みへ声を響かせる。雨のように降り注ぐ音たちをつかんで、息を大きく吸いこみ、翼を広げ、さあ――歌を、
（――あ）
思った瞬間の失速。そして、失墜。心に空いたすきまに、ひとつのピースをとり落とす。
その瞬間にきらめく世界は色を失い、薄灰色にあせていく。こぼれていく音の雨。すぐに取り戻せ、と必死に声を張り上げても、落ちていったものは拾い上げられることをかたくなに拒む。音圧が失われ、現実が近づいてくる。真っ暗に沈みゆく視界と、感情の消えていく音楽が小夏を襲う。
（いや……お願い、待って）
懇願しても、けっして戻らない。

伴奏の余韻がぷつりと途絶える。
ヘッドフォンからなにも聞こえなくなったのを確認してから、重い息をついた。
曲が終われば自然と周りに満ちる、完全な無音が耳に痛い。自分を責め立てるようなそれから逃れるようにスタジオの外をふり向くと、窓の向こうのふたりはそろって首をふる。
――予想していた答えではあった。
歌うさなかに浮かび上がった違和感は、最後の最後まで消えずにくすぶりつづけた。歌った本人さえ満足できないような歌が、他人に受け入れられるはずがない。
最近はいつもこうだ。歌っても歌っても、はしから違和感がわいてくる。リテイクをくり返すほど声は疲れ、それでも違和感は大き

くなるばかりで、いつかは歌がきらいになってしまいそうで怖くなる。
「すみません、今日はもう」
申しわけなさでいっぱいになりながらマイクに伝えて、うつむいた。マネージャーの野宮が表情をゆるめてうなずいたので、怒られることはないみたいだとほっとする。
スタジオの扉を開けると、とたんに雑音が耳にはいりこんでくる。歌手になるまでは気付くことのなかったわずかな環境音だ。野宮とエンジニアの会話も、そのときになってじかに伝わってくるようになる。
「もう六時をまわったし。終わりにしましょうか」
「今までのデータはどうします？　一応残っていますが」
野宮の目が一度、小夏に向けられた。視線がからみ、小さな間のあとに彼女は首を振った。
「本人も納得がいっていないようなので、消しておいてください」
「わかりましたー」
間延びした声が了承する。わたしはなにも言ってないのに、と恨めしげに小夏はパソコンの画面を見やった。そんな彼女の心中に気付くふうもなく、画面の中の歌唱データはまたたく間に消去されていった。エンジニアは回転式の椅子をくるりと反転させて問う。
「次はいつにします？　学校もまだあるのかな。今までどおり一週間後の土曜ですかね？」
「そこにはまた別のレコーディングがあるので……それが終わるまでは、この曲は延期ですね」
今日で終わらせるはずだったのに。言外に苛まれているような気がしてくる。
しかしそのニュアンスに傷心するより先に、小夏の頭には疑問符が浮かんだ。
（いまのって）
ぱっと野宮の顔を見上げる。――別のレコーディングがあるだな

んて、そんな話は一言も聞いていない。
「野宮さん、今の、どういう」
「あら、言ってなかったかしら？　同じ事務所の相手からコラボ楽曲の申し入れが来ててね、それを受けたの」
「だれと」
「誰だと思う？」
「野宮さん！」
「ＳＨＥＥＮＡさんよ、あの」
し……っ、とすっとんきょうな声をあげてしまって、口元をおさえる。
“あの”。そんな一言が添えられるほどに、今となっては有名な名前だった。音楽界に現れた彗星、低迷しかけたこの世界に差した光芒。雑誌や新聞を見れば称賛の嵐で、今世紀最高の歌手だと噂されることもしばしば。
そしてその名は、小夏がいちばん聞きたくないものでもあった。
――しいな、シーナ、ＳＨＥＥＮＡ。半年前のシングルＣＤランキングで、自分の上にその名前を見つけてしまったそのときから不調続きだ。なにを歌ってもいまいち納得がいかない、売り出した楽曲はどれもこれもＳＨＥＥＮＡのそれにはかなわない。
世代の女子高校生歌手、雨宮小夏の名は、いつのまにか人々の頭から消え去っていた。
そんな相手からコラボレーションの申し入れだ。自分の意思が通るのなら四の五の言わずに却下しているところだけれど、あいにく立場が弱いのはこちらのほう。なにか言おうものなら子どもの文句だと取られてたしなめられるのが関の山だ。それがわかっているくせに、ただで認められるほど大人にはなれなかった。
「それじゃあ、ＳＨＥＥＮＡの顔は」
「ＳＨＥＥＮＡ、さん」
「……ＳＨＥＥＮＡさんの、顔は見られるんですか？」
小夏の言葉を受けて、エンジニアが手を叩いた。

「そりゃあいい！　レコーディングの際にはぜひうちのスタジオを。覆面歌手のご尊顔がおがめるのであれば、料金の方もお安く……」
「いいえ、ＳＨＥＥＮＡさんのレコーディングスタジオはもう決まっているそうなので。小夏ちゃんとは別の日に録るから、お会いすることはないわ」
小夏とエンジニアがふたりで肩を落とす。
ＳＨＥＥＮＡの人気を手伝っているのが、いっそ厳格なまでの機密性だ。顔はおろか、性別も年齢も秘密とされている。歌声には男声と女声の両方を使い分け、さらに楽曲のそれぞれが異なった声色を持つ。もちろん顔だしのテレビ出演はすべて断り、ラジオなど肉声が入るメディアにすらも現れない。
いつかＳＨＥＥＮＡは二人組ユニットなのではないかと噂されたこともあったが、事務所側は断じてひとりだと主張を続けた――その確証はどこにもないにも関わらず。七色の声を持つ覆面歌手として売り出されたＳＨＥＥＮＡは、確かな歌唱力も相まって老若男女を問わず急速に支持されていった。
その波の広がりは、小夏の機嫌を損なうには十分すぎるほどで。
「それじゃあ、ご挨拶にうかがうぐらいは」
「小夏ちゃん」
「だめ、ですか」
深くうなずかれ、小夏は口をへの字に曲げる。――気に入らない。コラボの相手にも顔を見せないなんて。
「初めての共同制作の相手に選ばれたらしいから、ね？」
野宮の声に、かすかに苛立ちが混じった。聞きわけがないと思われているに違いない。ぶんむくれた顔で分かりましたとだけ答えて、そっぽを向いた。険悪になりかけた空気を感じ、エンジニアが頬をかく。
「今日はおしまいですかね？」
「ええ、ありがとうございました」
彼がさっさと道具を片付けて立ちあがると、多大な負荷がかけら

れていたことを示すように椅子がきしんだ音をたてた。
ひとこと、ふたこと、マネージャーとエンジニアの間に言葉が交わされる。それらは小夏の耳にはまったく入ってこない。どうにも、いたたまれなくなった。
「……おつかれさまでした！」
通学用の鞄を手に取って、頭を下げあう二人の間をすり抜けた。
弾かれたように部屋を出る。小夏ちゃん、と名前を呼ぶ声も聞かぬふりをして、走る一歩手前の早足で廊下を抜けていく。ごめんなさい、ごめんなさい、次はもっと上手に歌うから。そう心の中で叫びながら。
途中途中でかかるねぎらいの声にも答えずにいると、ますます自分がみじめになっていくようで胸がつまった。自分の足元の影だけをにらみつける。勇み足で歩くたびに硬い足音がスタジオに響いて、職員たちがなにごとかと小夏をふり返った。
――なんて、弱い。
歌が大好きで、ずっと歌っていたくて、その願いを叶えるために歌手になったというのに。人気なんか出なくてもかまわない、自分の歌を聞いてくれる人たちに届けばいい。そう思っていたはずが、今ではその歌でさえ嫌いになりかけている。
歌が好きなのか、それとも歌手という立場が好きなのか。即答できる自分でいられなくなっていた。
泣きたいやら情けないやら。プロなのだから、これぐらいのことでいちいち心を乱されてはいけないというのに。
（腹が立つ、ったら！）
いらだち紛れに思いきり建物の扉を開くと、がつんと振動が伝わってきた。なにかにぶつけてしまったのか。どきどきしながら扉の向こうをのぞいた小夏の顔から、さっと血の気が引いた。
相手は人だ。それも男の子。
自分と同じか少し下ぐらいの年にみえるが、制服を着ていないため学生なのかすらわからない。運動など知らないような白い肌に、

男子にしては細い骨格。無言で頭を押さえてしゃがんでいるのは、扉から入ろうとしたまさにその瞬間に、小夏がそれを押しひらいてしまったからかもしれない。

「ごめんなさい、……だいじょうぶ？」

あわてて小さな隙間から外へ出て、彼の隣にかがみこんだ。う、とうめいた声は、外見にたがわず中性的でやわらかい響きを持っている。すこしだけ鼻声ではあるものの、そこに不快感はなかった。

「だい、じょうぶ……です、すいませ、」

そんな声が、口の中でくぐもる。むしろそれは小夏の心配をあおった。大きなたんこぶができているかもしれない、手当ては必要だろうか。

小夏の心配をよそに彼はぱちぱちと数回まばたきを繰り返して、やっと彼女を見あげる。身長は低いみたい、と、おぼろにそう思っていると目があった。彼はけげんそうに眉を寄せたりのばしたりしたあとに、はっと息をのんだ。

「あまみや、こなつ」

そう呼び捨てにされたことを、喜んでもいいものだろうか。

## マネージャーの弟くん

瀬尾小夏。それが小夏の本名だ。芸名である“雨宮小夏”も名前の字面はまったく変えていないだけに、見ず知らずの相手に面と向かって呼び捨てにされると言葉につまってしまう。最近はマネージャーと会話をすることが多いので“ちゃん”付けに慣れてしまっていたけれど、久しぶりに呼ばれた歌手としての名前には背筋が伸びた。

「ごめんなさい」

言うことに困って、とりあえずもう一度だけ謝っておく。すると相手は小刻みに首を振った。

「こっち、こそ。すいません、邪魔なところに立ってて」

「悪いのはわたし」

怒ったつもりはないのだけれど、彼はしゅんと肩を落としてしまう。声がきつくなってしまっただろうか。くせのようなもので、なかなか抜けないので困っている。

優しく、優しく。自分に言いきかせて胸をおさえた。立ちあがると、彼も一呼吸おくれて腰をあげる。

「ええと、……スタジオに用があるの？」

歌手としてデビューを果たしていないような一般人でも、代金さえ払えばスタジオハウスを使うのは自由だ。ギターやドラムなどの楽器を貸し出しているところが多く、追加料金でミキシング――音量や音質を調節して組み合わせる作業を頼むこともできる。

とはいっても、たった今小夏が使っていたのはぴんからきりまであるスタジオの中でも高額で、質の高い録音を目指すためのものだ。その料金も、いち学生がぽんと払えるような金額ではない。

だからこそ尋ねたのだけれど、彼はきょとんとしたあとに、いや、と否定する。

「いま、スタジオに姉ちゃ……姉がいて。知ってる――ますか」

「敬語じゃなくていいから。続けて」
すると彼は視線をさまよわせ、やがて小夏のそれとぶつかるとためらいがちに喋りだした。
「姉ちゃん、歌手のマネージャーで。ＳＨＥＥＮＡって知ってるかな」
嘘をつかないで、と即答することだけはかろうじて踏みとどまった。その代わりに露骨に顔をしかめてしまって、これでは突っぱねるのとどちらがよかったのか分からない。彼は小夏のその表情にいささか驚いた様子をみせたものの、自分の言葉を取りつくろうことはしなかった。そろそろと彼女をうかがう。
「色々なところをまわって、次の曲のスタジオを決めているらしくて……あ、そうだ。小夏さん」
小夏と目を合わせ、ほほえむ。
「コラボを受けてくれて嬉しい。ってＳＨＥＥＮＡが言ってたって……言ってた、みたい」
声はどんどんと尻すぼみになっていったうえ、言い方は遠回しにもほどがある。しかしその言葉の中身に、小夏は目をまるくした。それを受けることになった当人でさえ、今日になってはじめて聞かされた話だというのに。
一般人ではまず耳にできるような情報ではないはずだ。それこそ、ＳＨＥＥＮＡか小夏の関係者でもなければ。
「ほ、ほんとうに？」
「嘘じゃない。嬉しいって」
こういうときだけはまっすぐに人の目を見るらしい。
「そっちじゃなくて、お姉さんのこと。ＳＨＥＥＮＡのマネージャーって本当なの」
そう問いかけると、やっぱり信じられないか、と彼はななめ下を向いた。
小夏はしばらく彼をながめたすえ、ひっそりとため息をついた。どうしても嘘をついているようには思えない。これでも業界人なの

だから、初対面の相手をよく観察する目は持っていると自負している。
信じてみようかという気持ちが働いた。わざわざ小夏を騙すためだけにここまで来たとは考えにくいし。
（それに、もし本当なら）
これはチャンスだ。
本人と直接会うには至らなくとも、自分の言葉だけでも伝えられればそれでいい。――うまくいけば、その正体をつかむことも夢ではないだろうし。
嘘だったとしても、だまされたと悔しがるだけでいいのなら。小夏はうなずいて、彼の言葉を待たずに口をひらいた。
「ＳＨＥＥＮＡに会うことはあるの？」
もちろん彼自身には期待はしていない。要するに、彼からＳＨＥＥＮＡのマネージャーに、さらに本人へと伝わればじゅうぶんなのだ。そう考えていたけれど、予想に反して彼は遠慮がちにうなずいた。
「あ、でも、会わせることはできないから……」
「いいわ、そんなの！」
小夏の声に興奮が混じる。
これでＳＨＥＥＮＡへとつながるパイプができた。百パーセント信じているとはいえないまでも、かけてみる価値はある。
小夏は早まる鼓動をおさえるように、ひとつ呼吸を置いた。
「ＳＨＥＥＮＡに言いたいことがあるから、それを伝えて欲しいの」
「……内容にもよるけど、おれでよければ」
長いのもちょっと、と目をそらした彼に、小夏は唇の端をつり上げて挑戦的に笑った。彼の向こうにいる、形の定まらないＳＨＥＥＮＡの影を見すえて。
「ひとつだけよ。――“あんたには絶対に負けない”って」
彼は目に見えてうろたえる。
「え……ＳＨＥＥＮＡが、なにかしたの？」

「特になにも。ただ気に入らないの、悔しいのよ」
なにもかも奪っていって、平然とあの位置に立っているその歌手がうらめしい。そこはわたしのものだったと叫ぶことなどかなわず、せめてどんな奴なのかと顔を見ることさえも許されないでいる。……なにが覆面歌手だ、なにが七色の声だ。なんでもかんでも秘密にしておいて、誓ってひとりだから信じてくれとは虫がいいにもほどがある。
もちろんそれをぐちぐちと吐き捨てるのは自分のプライドに反していた。小夏は肩をすくめる。
「それにわたしが不調だから。自分にはっぱかけたいの」
「不調？」
「歌っても満足できないっていうか、ね……そういうときがあるの、歌手って」
わたしはこれがはじめてだけど。胸の奥でそうつけ足した。
「あんたが気にすることじゃないわ、ええと……弟くん」
呼びかたに迷ったすえにそう呼ぶと、案の定彼は眉間にしわをよせる。
「和樹って、名前が」
「はいはい。覚えとくわ、弟くん」
「……聞いてないし」
いいところに収まってしまったのだから仕方がない。初対面の相手を名前で呼ぶのは腰が引けるというのも事実だ。
和樹がむすっとしている前で、鞄に取りつけている時計で時間を確認した。夏が近づいているために、今の日の長さはあてにならない。七時半までに家に帰れないのであれば連絡を入れろときつく言われているが、これから急げば間に合いそうだ。彼の横を通り抜けてふり返る。
「じゃあわたしはこれで。伝言よろしくね。あとは頭、ごめんなさい」
「あっ、返事はいつ伝えれば」

返事が返ってくるのが当たり前だと言わんばかりのせりふに、思わず吹きだしてしまう。和樹はなにを笑われたのかわからないようだけれど、それを説明するつもりは毛頭なかった。

一方的な伝言に、わざわざ返事を返すような律儀な人間。ＳＨＥＥＮＡはどうやら、そんな相手らしい。

さて次に会うのは、と考えて千夏はそらを見た。うすい水色の空に、紫のグラデーションがかかっている。この水色が完全な藍色に染まるまでには、まだ時間がかかりそうだ。

（事務所に呼ぶわけにもいかないし）

ＳＨＥＥＮＡのマネージャーの弟であれば事務所の場所ぐらい知っているだろうが、直接的な関係があるわけではない小夏が彼と待ち合わせをするのではよからぬ噂がたつおそれがある。そもそも事務所は歌手、ひいては業界人の仕事の場なのだから個人的な要件は持ちこみたくない。野宮に関係を疑われるのも癪だ。

「来週の金曜日、六時。またここでどう？　学校の帰りに寄るから」

通っている私立の高校は近くにある。部活には入っていないため、長く待たせることはないだろう。和樹がはっきりとうなずくのを確認して、小夏は今度こそ彼に背を向けた。

日が沈みはじめ、足元の影は遠くまで伸びている。まるでマイクのようだと頭のすみで考えて、苦笑した。どうしても歌からは離れられないみたいだ。嫌いになりかけても、歌がこちらを向いてくれなくても、結局は同じところに戻ってきてしまう。

（戻れるのかな）

歌手になったときのように、歌うことを心から楽しめた日々に。不安に負けてしまいそうになって首を振った。

「だいじょうぶ」

そうつぶやいて暗示をかける。まだ歌える。好きでいられるかぎり、嫌いにならないかぎり。

わたしはまだ、雨宮小夏でいたい。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6825y/

---

レイニーソング

2011年11月21日03時15分発行